

戦後五十年に思う

藤原 田鶴子

戦争が終わったらしい、いや負けたのだと、大人達が玉音放送^{*1}を聞いて興奮して話しをしていた。8月15日は私の誕生日で、朝早くからりんごの買出しに行って戻って来た父が、リュックサックごと投げつけて口惜しがった。

小学校時代は戦争一色の教育を受け「ほしがりません勝つまでは」の日々を過ごした。事が起れば必ずや神風が吹き、守ってくれると信じていたので、これは一体どうしたことかと、子供心に思ったものである。

40歳近い父にも召集令状が来て、出征する数日前であった。父が兵隊に行ったらこの先どうなるのか、長女である私は心配していたので、終戦の報せに内心胸をなで下ろしたのは事実である。

故郷の町芦別は、炭鉱に囲まれていて、アメリカや中国の捕虜が多数働かされていた。今にその人達が解放される、その時はどんなひどい目に遭わされるかわからない。殺されるかもしれないなど憶測が乱れ飛び、戦争中よりも不安な日々を過ごした。しかし、そのような心配をよそに、アメリカ人や中国人が街を出歩くようになり、何も危害を加えないとわかると、恐る恐る後をついて歩いた。それが受持ちの先生に見つかり「恥を知りなさい」とほほを打たれたこともある。

国語や歴史の教科書を墨で塗りつぶし、今までの教育は間違いであると、言わなければならない先生にしてみれば、そうするよりほかに仕方がなかったのであろうと、今になって思う。

* * * * *

昨年（平成6年）主人と山陰や山陽への旅をした。そのツアーのコースに、広島原爆資料館の見学があった。投下直後を再現したコーナーは、目を覆いたくなるほど凄まじいもので、展示ケースに並ぶ一つ一つに涙がこぼれた。弁当箱のご飯が熱射で炭化しているのである。ボロ布のようになった衣類、ネームの残る学生服、一瞬にして25万余の生命を奪った原爆の威力を物語っていた。しかし、現実には想像をはるかに越えて、更に悲惨なものであったと思う。

70年間草も生えないだろうと言われた広島は、緑が豊かに茂り、平和そのものであった。公園は、修学旅行の子供たちで賑わい、平和の鐘の音がゆったいりと響いていた。そんな光景を見ていると、この子らのために、平和が永遠のものでありますようにと、祈らずにいらなかった。

修学旅行の子らでさざめく公園に

平和の鐘の音絶ゆるなし

今も世界のどこかで戦争がある。幼い犠牲者が後を断たない現実が悲しい。

田舎に住み戦争の悲惨さを見ずに来たことを私は幸せに思うが、戦争を二度と繰り返さな

いためにも、政治の大切さを再認識した。

「悲劇から学ぶことでより良い世界を築くことができる。戦争の惨禍を再び繰り返さない」と戦後 50 年にあたって、広島市長が述べておられる。今日の平和が尊い犠牲の上に築き上げられたことを、決して忘れてはならないと思う。

(ふじわら たずこ 昭和 8 年生まれ)

***1 玉音放送** 昭和 20 年 8 月 15 日正午、天皇陛下が戦争終結の詔書を朗読したラジオ放送。前日の 14 日、御前会議でポツダム宣言受諾を決定し、連合軍側に伝え、日本は無条件降伏をした。詔書は、あらかじめレコードに録音されていた。